

令和元年度「京都市生涯学習市民フォーラム」シンポジウム  
**伝統に今を織りなす学びのまち京都**  
 ～多様化する現代に、より良い社会を創造する学び～



こんにちは。  
 生涯学習マスコットのマナビです。  
 フンフン飛び回って、  
 皆さんの学びを応援しています！  
 京都市生涯学習市民フォーラムの  
 シンポジウムの様子を  
 「レポートします」♪



令和元年11月5日、約250の生涯学習関係団体のネットワーク「京都市生涯学習市民フォーラム」の総会が、京都大学百周年時計台記念館で開催されました。

総会に続くシンポジウムでは、松本会長と門川市長が、ゲストにウスビ サコさんと柗木 良子さんを迎え、番組小学校創設150周年を記念して「ダイバーシティ (多様性)」をキーワードに、より良い社会を創造するために必要な学びについて、語り合いました。

- ◆ 令和元年11月5日 (火) 午後2時～4時 京都大学百周年時計台記念館
- ◆ パネリスト 松本 紘 氏 京都市生涯学習市民フォーラム会長 ※コーディネーター  
 ウスビ サコ 氏 京都精華大学 学長  
 柗木 良子 氏 京都市社会教育委員、同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師  
 門川 大作 京都市長

◆ はじめに

(松本会長)

それでは、進行は松本が務めさせていただきます。宜しくお願いします。壇上に上がられましたお二人に自己紹介をいただきますが、その前に私の簡単な自己紹介をさせていただきますと思います。

私は奈良市民で、京都市民ではないのですが、京都大学にお世話になった50年間、京都の皆様いろいろなご縁をいただきました。そういうご縁で、門川市長からこのフォーラムの会長を務めてほしいと言われてまして、喜んでお引き受けしました。

京都の町は私がいた50年間にも大きく変わりました。私の学生時代には、奈良から奈良電という電車(今の近鉄)で京都に行きまして、そこから市電でこの京都大学まで通っていたことが思い出されます。町も変わりましたし、大学も人も変わっていく、ヒストリーを目の当たりにしました。

皆さんご存知と思いますが、京都は、明治の時代に天皇陛下が東京に行ってしまうと、大変気が滅入った時代がありました。しかし、「さすが京都市民」と思うのは、その間いろいろな事業に取り組んでこられました。

例えば、京都では明治2年、今から150年前に、全国に先駆けて学区制の小学校である「番組小学校」を創立しました。これは後ほど門川市長から詳しく御説明をいただきたいと思いますが、今回はそういった番組小学校150

まつもと ひろし 松本 紘 氏 プロフィール



前京都大学総長。専門は宇宙科学・宇宙電波工学。「生存圏研究所」「iPS細胞研究所」の開設やグローバルリーダーを育成する大学院「思修館」を創設。2015年から我が国唯一の自然科学の総合研究所である「理化学研究所」の理事長として、世界のRIKENを牽引。2017年1月には、京都市生涯学習振興財団理事長に就任。

京都市生涯学習市民フォーラム

京都市と生涯学習に関わる諸団体の連携・協力関係のもと、市民の持つ活力と英知を結集し、まち全体を学びの場とする、生涯学習のまちづくりを推進するための約250団体からなるネットワーク組織。1994年1月20日設立(平安建都1200年を記念して設立)。

周年を記念して、「学び」ということに焦点を当ててお話をいただきたいと思います。

社会は大きく変化しております。良い方向に行っているとは必ずしも言えませんが、皆さん一人一人は良い方向に行きたいと思っている。思っているも、多様な国々があり、様々な利益を追求する国々があるので衝突することもあります。あるいは意見の違いがあったりすることもあります。やはりどの政治リーダーも最後には「対話」ということを言います。武力に訴えずに対話ししましょう、ということは大変好ましい。

日本は戦後 70 年、幸いにも直接戦争に関与せずここまでやってこることができました。今上天皇もそうですが、前の天皇である上皇陛下、上皇后陛下も「平和」ということを盛んに言われました。日本はそもそも太平洋戦争まではあまり大きな戦争にコミット（関係）せずにはきましたけども、これからは国際社会が小さくなっていますので、お互いの国々が仲良くしていくということを探さなければなりません。

ベースはそれぞれ、一人一人だと思うんですね。一人一人が学ばないと、例えば、生まれたばかりの人を野生に放ちますと狼少年、狼に育てられた少年という意味ですが、文明文化を身につけない人になってしまいます。そういう意味で、お互いがお互いを刺激しあって、お互いから学んでいく、「自分から学ぶ」という姿勢と「周りから学ぶ」という姿勢、これが大変大事であろうと思っています。

今日は「ダイバーシティ（多様性）」ということをキーワードに、ゲストの方々にも様々な立場から取組みについてお話をいただきたいと思いますが、まずはゲストのお二人、それぞれに自己紹介をお願いしたいと思います。

最初はウスビ サコ学長をお願いします。

## ◆ **ウスビ サコ学長自己紹介**

(サコ学長)

皆さんこんにちは、京都市民のサコです。折角の機会なので、私がどこで生まれ育ったのかということを含めて、お話ができたと思っています。

私は現在京都精華大学の学長をしております。京都大学大学院で博士号取得後、日本学術振興会特別研究員として京都大学に残り、その後 2001 年から教員として京都精華大学に着任しました。

京都精華大学は、リベラルアーツ、グローバル、表現などを掲げて大学づくりを行っております。先ほどダイバーシティの話が出ましたが、京都精華大学では約 650 人、全校生徒の約 20%が留学生です。

私が学長になってから、色々と目標を設定しました。留学生を 40%に増やすだけでなく、外国人教員、職員を増やすとか、女性の役職者を増やすなど。

今、日本ではこういう点は OECD の国々の平均で見ても遅れています。大学の外国人教師の割合は、全国で 5%にも満たないんですね。精華大学では、それを 30%に増やすために取り組んでいるところです。

### ● **サコ学長の経歴について**

ウスビ サコ 氏 プロフィール



京都精華大学学長。マリ共和国出身。1991 年に来日し、2018 年 4 月から現職。バンバラ語・英語等の他、関西弁にも堪能。暮らしの身近な視点から、多様な価値観を認め合う社会のあり方を提唱。

京都大学大学院では、工学研究科・建築学専攻（修士課程・博士後期課程）でした。その中で、環境共生建築、エコデザインであったり、コミュニティ研究であったり、都市再生、町家など、様々なことをやってきました。

たまたま話せる言葉は、バンバラ語・マンディカ語（母語）・ソニンケ（民族語）、フランス語（公用語）、英語、中国語、日本語です。もともと母国のマリは多民族が住んでいるので、共存するために相手の言葉が話せるというのは生きていくために必要なことなんです。言葉というのは、趣味ではなく、必要だと感じるのが非常に重要だと考えています。私自身、中国あるいは日本に住んでいる時に、その言葉で言わなければいけない、生きていく上でそれが必要だ、ということで色々な言葉を勉強してきました。

私はマリの高校を卒業して、1985年に中国に渡りました。1985年というのは、中国では改革開放制度の最中で、外国人に来てほしいけれども、外国人と中国人とが関わることには慎重、というかなり複雑な制度の中で勉強してきました。

中国で建築を勉強していた時に日本を訪問して、その後1991年から京都大学にわたって工学部の研究室にお世話になりました。そこでは勉強も重要だったのですが、飲み会をしたり、パーティをしたり、日常の交流に力を入れていました。この時何が一番悔しかったかと言うと、私はお酒を一滴も飲まないんですけど、みなさんはお会計を割り勘にするので、未だにちょっと返してほしいなと思っています。（笑）

サッカーはマリでの人気スポーツで、私もやっていました。京都大学にいた間も、地域スポーツ少年団で6年間ほど中学部の監督をしていました。

## ● マリの地理について

私の母国であるマリは西アフリカに位置し、海に面していない国です。首都はバマコ。私の生まれ育った都市です。公用語はフランス語です。日本の3倍ほどの広さがありますが、人口は大阪府+ $\alpha$ ぐらいです。1960年にフランスから独立を果たしました。

マリには23の民族があり、30以上の言語があります。言語はそれぞれ文字がないので、口承文化で歴史などを伝えています。なので、私たちは耳で聞いて返す、ということが文化的に慣れている方もかもしれません。

北部に行くとベルベル族（Berbères）とか、アラブに近いところだとトアレグ族（Touareg）とか、南に行くと黒人系の人たちが主に住んでいます。

マリにあるサハラ砂漠は、昼間は非常に暑く56度になりますが、夜は5度から10度しかありません。

世界文化遺産もあります。8世紀からずっと16世紀までマリ帝国などの中心地でした。旧市街のジェンネは全部泥でできている歴史的都市で、世界文化遺産です。他にもトゥンブクトゥなどの世界文化遺産があります。

## ● マリの文化について

ドゴンでは、60歳以上の人はここでは神様扱いで、いわゆる長老や顧問になります。その人たちはトグナというドゴン族の長老の集会場で、毎日相談を



マリの首都バマコ



世界文化遺産 ジェンネ



ドゴン族のトグナ（集会場）

受けています。

マリの食文化について。マリでは、朝食は甘いお粥です。マリの米は日本とか中国から来たのではなく、アフリカ米で、千年前から栽培しているそうです。後は、川魚を燻製にして、ダシに使うということもあります。マリの食文化は、日本とかなり通じるものがあると私は思っています。

また、マリにはお茶文化もあります。緑茶を煮込んで飲む儀式があって、お茶を飲んだ後に色んな話をする。お茶の文化でもかなり近いものを感じています。

マリの伝統衣装は藍染です。どちらが古いかはわかりませんが、京都とマリ、どちらにも藍染があります。マリの全ての伝統的な行事は、必ず藍染の衣装で行かないといけません。あとは、マリの泥染めも非常に古い文化です。

### ● マリの教育について

マリの子どもたちは、日中は学校に行き、帰ってきたら家の手伝いをします。これは、昔は日本もそうだったかもしれません。自分の家業によって、学校から帰ってきたら船づくりを手伝ったり、家畜の世話を手伝ったりとかが当たり前です。

マリの学校は、日本と制度が似ている(小学校6年, 中学校3年, 高校3年)んですが、大学は5年間です。そして、教育費は全て無料ですが、成績が悪い人は小学校1年生から留年します。2回留年すると3回目は退学させられます。ここは日本と違います。小学校から中学校に上がる時に国家試験を通らなければなりません。義務教育といいながらもそういう強制退学の制度があるというのがマリの学校です。見てのとおり、マリの学校のクラスは非常に人が多くて溢れています。日本とマリが色々な関係を作ろうとしていますが、こういったマリの教育をどう支援していくかというのもひとつの課題だと思っています。マリの社会には文字文化がないので、口承文化が中心になっています。マリには二重の教育制度があると言えます。無文字で口承文化を中心とした地域や社会教育とフランス語とその価値観を中心とした学校教育です。

### ● サコ学長の研究について

私の研究内容は建築だけではなく、伝統がどうやって継承されていくのか、どういう問題があるかといったことも調べたりしています。

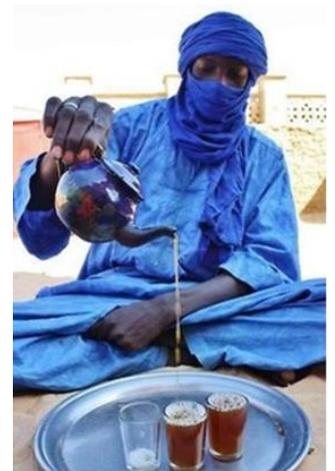
その中で、マリの生活とかコミュニティとかがどういう風に変化していくかということも研究対象としています。マリは中庭型住宅で、誰がどの場所を占有して使っているか、1日に人がどう動くかということを探っています。

同じようなことは京都の打ち水でも言えます。京都のコミュニティでお互いの占有スペースを打ち水するということは、マリの中庭にも通じるものがあります。京都の町家の再生は非常に深刻

ですが、そういったものについても興味がありますし、番組小学校にも興味を持っていて、地域のコミュニティとかを調べています。



川魚の燻製



マリのお茶文化



マリの学級

## ●最後に

私は、京都とアフリカの関係を作っていきたいと思っています。2050年には世界では97億人ぐらいの人口規模になります。一方で京都は高齢化が進んで、かなり深刻な状況になります。マリでは、女性が一人当たり6.35人産んでいます。そして0歳から65歳の生産年齢人口が全体の90%を超えていて、これがしばらく続くわけです。SDGs（エスディーゼズ）については、アフリカとの関わりなしでは達成できないんじゃないかと思っています。

私は、多様性というのは「お互いの違いを認めるということ、お互いに違いとともに成長していくということ」だと信じています。私自身、他者と出会うことによって自分を再発見する、そういうことを大切にしてきました。それが京都市民としての歩みです。

(松本会長)

ありがとうございました。市長から質問があればお願いします。

(門川市長)

日本で初めてのアフリカ出身の学長が京都から、というのはとてもいいですよ。

21世紀後半から22世紀にかけてはアフリカの世紀になる。アフリカとの関係でいうと、京都市では、あしなが奨学金で、元向島二の丸小学校の跡地でアフリカ49カ国の18歳の身寄りのない子どもに1年間学んでもらい、2年間好きな大学に行ってもらおう。これを100年続けようということがまとまりました。

向島の地域の方々からは、すごくダイバーシティを尊重していただいています。「いずれこの向島で、京都で学んだ人が、アフリカのどこかの国の大統領になるかもしれない。これは夢があることです。こういうことに貢献できる京都で嬉しいです。」とお言葉をいただいた。

アフリカを支援していこうという輪の中に、松本会長もサコ学長も関わっていただいています。

京都大学で学ばれたサコ学長ですが、京都の町が多様性、留学生を受け入れていく手立てについてはどうお考えですか。

(サコ学長)

先ほどお話した精華大学の目標設定の中で、留学生を40%に増やしていくと言いましたが、私はこれを自然増でできないかというふうに考えております。

どうということかと言うと、どの大学も留学生試験で留学生を取っていますが、精華大学は昨年度から留学生が日本人と同じ試験を一緒に受けるということをやりはじめました。

そうすると、我々もあまり想像しなかったような、いろんな留学生が出てくる。日本語の小論文でも、留学生がトップになったりする。

### SDGs（エスディーゼズ）

SDGsは、2015年9月の国連において、気候変動、自然災害、生物多様性、紛争、格差の是正などの国内外の課題の解決に向けて掲げられた国際目標（17の目標と169のターゲット）。

2030年までの目標達成に向けて、世界の全ての国・地域の政府だけでなく、更には地方自治体や民間企業等もその達成に向けて取り組むこととされている。

※ SDGs は、「Sustainable Development Goals」の略称のこと



### 元向島二の丸小学校跡地活用

一般財団法人あしなが育英会からアフリカの遺児のための教育研修施設兼寄宿舎「京都志塾」等建設に係る提案を受け、本市は元京都市立向島二の丸小学校跡地の活用に着手することを決定し、合意内容についての協定を令和元年12月24日締結。

今後、京都市、あしなが育英会及び地域住民の三者による事前協議会を設置・開催し、基本協定に基づき、事業の具体化に向けた協議を行う。

### 一般財団法人あしなが育英会

病気や災害、自死（自殺）などで親を亡くした子どもたちや、親が重度後遺障害で働けない家庭の子どもたちを物心両面で支える団体。

平成26年からアフリカの中でも世界最貧国と言われているサブサハラ(サハラ砂漠以南)アフリカ49箇国の各国から毎年一人ずつ優秀な遺児を世界の大学に留学させ、母国の様々な分野で活躍するリーダーを育てるという「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」を展開している。

日本人の学力の測り方などに、留学生が入ることによって、刺激があって、お互いに相乗効果があるのではないのでしょうか。留学生の自然増を目指すには日本人と同じ扱いをしていくしかないんじゃないかと私は思っています。

フレーム、型を破っていくということが、この日本社会を多様化していくひとつのいい方法じゃないのでしょうか。

(松本会長)

榎木先生、何かご質問はありますか。

(榎木委員)

京都の大学を選ばれた理由は何かありますか？

(サコ学長)

私が京都に留学で来る前、90年に一度観光で来たんですが、その時はちょうど祇園祭の山鉾巡行の日で、「みんなこんな服装を毎日着てるのかな？」と思ってちょっとびっくりしたんです。それはちょっと違いましたが…。京都のお寺や自然も見ました。

その後、どこへ留学に行くかということで、京都の町というのはヒューマンスケールの町で把握しやすかった。自分の居場所を作れるかどうかというのが私にとってとても重要だったので、お客さんで京都に来たくなかった。その町で留学するんだったら、その町の発展とか改善とか、自分がどう参画するか、それができるかどうかということを前提に選んでいました。



(松本会長)

京都を選んでいただいて大変良かったと我々は思っております。

私からも簡単な質問をさせていただきます。感想に近いんですけども、アフリカの生活をご紹介いただきましたが、日本も50年ほど前は農村に行くと同じような発見がありました。<sup>かまど</sup>竈があたり、長老は長老の居場所があたり、子どもは子どもの居場所が決まっています、マリと全く同じだなという気がしました。

言語だけは違って、マリではほとんど音と会話で文化を伝えていくということでしたが、日本は文字で伝えていった。それが現代になって、違いになっているかなと思いましたが、基本的には同じだなという感じがしました。

アフリカでは部族、日本では地域ごとに、一つ一つの閉じた社会があって、ここ京都でも地域ごとに番組小学校がスタートしたのだと思いますが、地域の子どもたちは地域で育てる、という強い気持ちがありました。マリでも子どもたちを地域で協力して育てるということで、同じだなと思いました。

質問ですが、最初に行った国が中国だったということですが。

(サコ学長)

先ほどマリの教育制度の話をしました。マリでは植民地時代の教育制度がそのまま、できる人だけを引っ張っていく制度なんです。小学校6年生の時に国家試験があって、中学校も同様で、さらに高校を卒業する時には「バカロレア（大学入学資格試験）」というのがあるんですが、バカロレアで成績が良いと、国の奨学生として海外に行くことができます。

それは自分で行き先を選べないんですが、国の提案で、私の場合は中国に行きなさいということが決まりました。当時は中国に特別に関心があったわけではないのですけれども、国の政策で決まった。そして、本来だったら留学が終わったら国に帰って、公務員をやるということになります。

マリでは地域で子どもを見守っています。バカロレアの結果の発表と中国に行く発表というのはラジオ放送でされたんですが、これは非常に弊害がありました。私の親の出身地域でも放送があったので、留学に出発する前にその地域みんなが集まってくるんです。そうすると、全員分のお土産を帰るたびに買って行かないといけない。(笑)「出発する時に見送ったよね」とよく言われる。彼らの中で、私は今でも「地域の子」だと思われています。

(松本会長)

日本でも昔、「地域の子」という考え方がありました。どんなに貧しい子ども、「地域でその子を育てよう」となれば、みんなで協力をして、地域の代表として難しい良い学校に行かせる、ということがありました。

私も決して良い子ではなかったんですけども、中学校を卒業して高校に行く時に、お金がなかったので歩いて行ける高校を探したんですが、地域が応援してくれて、遠くの高校へ行くことができました。そのことは地域の新聞でも書いてもらいました。

それでは榎木先生、自己紹介の方をお願いします。

## ◆ 榎木 良子委員自己紹介

(榎木委員)

今回は登壇者の方々が、松本会長、サコ学長、門川市長、ということで、皆さん“長”がつく肩書きをお持ちですね。私だけ“長”がなかったんですけども、私、中学生の時に生徒会“長”をしていました。

下鴨中学校元生徒会長の榎木良子です。よろしくお願いたします。

下鴨中学校を卒業後は、京都市立銅駝美術工芸高等学校で染織を専攻しました。この学校は歴史が古くて、明治13年に学校ができて、来年で140年という歴史があります。

そちらで私は染織を専攻して、ろうけつ染め、型染め、草木染め、それから糸を染めて織り機で織る。そういったことを学んで3年間を過ごしました。学校は鴨川沿いにある非常に環境の良いところで学校生活を送っていました。

市内の真ん中にありますので、染織の授業の時に、例えば西陣織の見学に行くとか、博物館で小

まきき りょうこ 氏 プロフィール



京都市社会教育委員。同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師。女優として活躍後、着物雑誌モデルの経験を生かし、各地で着物の魅力を伝えるために精力的に活動中。



京都市立銅駝美術工芸高等学校

袖展を見るとか、そういう本物を間近にしながら染織を学んでいました。着物というのは染色と織りの全ての要素が入っていることに気づき、大人になったらこんな着物を着る生活をしたいな、というのは高校生の時に最初に思いました。

それで、染織の世界に進もうかなと思っていた矢先、大学1回生の時、19歳の時ですが、京都の太秦にある東映京都撮影所のコンテストで「ミス映画村」に選ばれて女優の道に入ることになりました。

## ●女優の道へ

デビュー作は「暴れん坊将軍」です。当時の時代劇で有名な方たちがいつも東映の撮影所にいらっやって、そんな時代に私もデビューをさせていただきました。

東映では、時代劇に出られる女優さんを育てるということで、最初の半年間は、茶道、三味線、お琴、立ち回りとかもちろんお芝居もですが、そういうお稽古ごとをさせてもらいながらどんどん制作現場にも出る、という大学生活を送っていました。監督さんから、「いつも着物を着ていないと動きが時代劇に沿わない。寝る時も浴衣を着て寝なさい」と言われまして。そこから衣装さんに着方を教わったりとか、先輩の女優さんからは、町娘と武家娘の立ち居振る舞いの違いなどをご指導いただいたりして、一年で300日ぐらいは着物または浴衣を着る、暑い日も寒い日も雨の日も、毎日着るという生活をしていました。

ところが、この頃まだ二十歳なのでハタチの乙女としては町娘とかじゃなくて、トレンドドラマとか出たいな、恋愛ものに出たいな、とかそういう欲が出てきて東京のプロダクションに移籍しました。そこでちょこちょこ現代物のドラマに出たりとか、テレビコマーシャルに出たりとかそういう活動をしていたんですが、その中で私の人生を変えるかなというぐらいの仕事に出会いました。

それが「美しい着物」という雑誌のレギュラーモデルです。もともと染織を勉強していたり、時代劇で着物を着たりしてましたので、「着物を着る」という仕事はちょうどその道だったのかもしれません。素晴らしい着物と帯を雑誌で着せていただきました。その雑誌のスタッフの着付け師さんが一流の方で、非常に綺麗に早く、楽に着せてもらえるんですね。「あ、着物っていいな」と改めてその良さが分かりました。それで、もっとダイレクトに着物を伝える仕事がしたいと思って、その雑誌の着付け師の先生に個人レッスンをしていただいたり、着物の雑誌を隈なく読んだり、独学を続けていました。

これに出ていた同じ頃に、NHK大河ドラマの「徳川慶喜」に出演することになりました。孝明天皇の妹、皇女和宮さんが公武合体のために将軍家に嫁ぐのですが、私の演じる女官も京都から和宮と一緒に大奥に入って、お局さん達とやり合う、という役柄でした。幕末は時代を見ても激動の時代ですが、大河ドラマの制作現場も非常に重圧がありました。錚々たる役者さんがおられますので、私はこの時に、私のいるところではないとやっと気づきまして、女優を辞める決心がついたんですが、奇しくも私のデビューは8代将軍「暴れん坊将軍」



「美しいキモノ」専属モデルに

でデビューして、15代の「徳川慶喜」が大政奉還して、徳川幕府が終わったと共に私の女優人生も幕を下ろしたということ。(笑)

芸能界ってとても華やかに見えるかと思うんですけども、ただ光を浴びる人は一握りで、非常にいろんな意味で厳しい世界っていうのは、私もそこにいながら実感しました。歌って踊れる人がいれば、お芝居ができるとか、スタイルのいい人、綺麗な人、一芸秀でている人、日本中から東京の芸能界に集まって、しのぎを削っているわけですね。そういう人たちと一緒にいると、「私は何もできない」とか、ちょっとコンプレックスの塊になってきたんです。

「何がしたい」ということよりも「私は何が出来るんだろう」、「私の強みって何なのかな」とすごく悩みまして、それを探る日々が続きました。それで、「私には着物がある!」と気づき、芸能界からはスッパリと足を洗い、生まれ育った着物の町、京都に帰りました。

### ●京都で着物の道へ

ひとまず京都に帰って着物のことで「私ができることは何か?」「出来る限りのことを何でもやっつけていこう」と考えて、着付け教室を始めたり、浴衣のイベントを企画したりとか、試行錯誤の日々を送っていました。少し染織を勉強していた、ということと、私世代の女性が着たい着物を作る、ということで、京都丸紅さんで着物のブランドを作らせていただいたりしたこともあります。

そういう活動をしばらくしていたんですが、また私のライフワークになるような出会いがありまして、2004年学校で着物の授業をするという活動を始めます。

私が京都に帰ってきた時、長く東京にいましたので、京都の着物事情を知らなくて、ちょっと浦島太郎みたいになっていたんですね。「京都は着物の町や」と思っていたんですが、室町通を歩いたりしても全然着物着てる人がいなくて。

着付け教室に来てくれるのは大人の方で、お金を払ってきてくださいますが、「それではあかんの違うか」と。もっと子どもの時から着物に慣れ親しむことをしていかなかったら、着物のことを知らないまま、着物に袖を通すこともないんじゃないかと思いました。それで、ひらがな片仮名、足し算引き算を学ぶように、「着物を着なくてもいいけど、まずは魅力を知ってほしい」という思いが目覚めました。

そういう思いで活動をしていた中で、機会をいただき、小学校に指導に行ったりとか、母校の銅駝美術工芸高校に行ったり、母校もこの年から始めて今年で15年間指導を続けております。小学生とか中学高校生には、まず浴衣を通して着物の形に慣れ親しんで、少し歴史を学んでもらう授業を行っています。思いの外、学生からの反響が良くて、「日本人に生まれて良かった」とか「浴衣、着物を着ると背筋が伸びて、言葉遣いまで良くなった気がする」とか。それから着物を畳んだりすることから「物を丁寧に扱おうと思った」とか、すごく好意的な評価をもらいました。

大阪の交野と東京の調布にある女子少年院にも5年ほど、慰問に呼んでいただくことができました。そこの女の子達も目を輝かせて「先生、ここを出たらお母さんと一緒に浴衣を着ようと思います」とか「バイトして自分の浴衣を買います」



とかそんな言葉をくれるんですね。そういうことを励みに、着物の魅力というのは、若い人の感性で、着物の可能性がまだ何かあるんじゃないか、と15年間毎年思い続けながら活動しています。

現在は同志社大学で留学生も日本人学生も一緒のクラスで着物の授業をしています。学年も1回生から4回生まで、学部も様々、出身地も様々ですが、若い人たちにとっては、着物は新しいファッションとして興味深く授業を受けてくれていますね。



(松本会長)

どうもありがとうございました。門川市長から何かご質問はありますか。

(門川市長)

私も市長になってから11年間着物を着続けているんですけども、11年前はものすごく違和感があったんですね。「何で市長、着物着てるんや」とか言われたり。今、着物を着て町を歩いていると、外国人に間違えられます。(笑)ちょっと悪い冗談ですけどね。

外国の方が着物に憧れておられる。それによって、日本でもだんだん着物を着る若い人が増えてはいるんですけどね。この世界最高の服飾文化を何とか継承していくということが大事です。和食も日本酒も、外国で評価が高まることによって、日本で評価が高まるということがありますので。

是非とも、子どもたち、日本の学生さんたちがどんどん着物を着ていただく機会づくりをよろしく願いしたいですね。

(松本会長)

サコ学長、マリで民族衣装の着付けを教える制度はありますか。

(サコ学長)

それはいいですね。マリの民族衣装も着こなし方とか、色々なパターンがあるんですが、日本の着物ほど難しい服装はないと思います。日本の着物は着るのに勉強もしないといけないし、理解もしなきゃいけない。私は非常に素晴らしいことだと思っています。そして、留学生とかいろんな外国から来た人たちが着物を楽しむ。

私たち外国から来る人は、日本に来ると非常にギャップにショックを受けるんです。私もそうなんですけど、外から見る日本というのは機械的なんですよね。みなさんが、ロボットのように毎日たくさん仕事をして、車を作って、電化製品を作って。でも、日本に来て着物と出会うと、日本はそういうものを大事にしているんだなあ、というのは我々も非常に考えさせられる機会になっています。

(松本会長)

ありがとうございます。着物の文化について、門川市長、どうぞ。

(門川市長)

文化庁が京都に移転してくるという時ですから、生活文化を大事にする。日本の最大の強みというのは生活文化ですから。生活文化は「衣食住」なんですね。

地域のコミュニティで、食を通じて人を育てる「食育」というのはずいぶん認知度が高まっている。次は「服育」なんですね。「襟を正す」とか、「袖触れ合うも他生の縁」とか「折り目正しい」とかという言葉もあります。

着物は大変なんですね。私の着物は女房がアイロンかけるんですけど、アイロンをかけるとピカピカになっちゃう。最近女房も考えまして、お布団の下に敷くんですよ。女房の下に敷いてもらって「折り目正しい」んですよ。(笑)

それから、これは専門用語ですけど「住育」。住まいで育てる。床の間がある、神棚がある、仏さんが祀ってある、ご先祖さんが祀ってある。そういうことから生き方を学んでいく。

「衣食住」でしっかりと文化を伝え、子どもを育てていくというのが、これからの京都の役割で、非常に大事なことだと思っています。



(松本会長)

生活文化を大事にするというのは大変良い視点だと思います。市長、是非進めてください。

着付けてというのは大変なパワーだなと思ったことがあります。着付けをちゃんとしないと、ゆるゆると着崩れてきますよね。

昔、益川敏英先生という京大の先生がノーベル賞をもらったことがありました。その時、先生の奥さんが着物を持っていかれたんですね。それで、着付け師がいなかったの、スウェーデンのストックホルムにおられる日本人に着付けてもらったんですが、やっぱりプロじゃないからしばらくするとゆるゆるとしてきて大変困惑しておられました。私は傍で見ていてこれは大変だと思って。

次の機会に、山中伸弥先生がノーベル賞をもらった時には女性が5人一緒に行かれたんですけど、その時は着付けの専門家の方が東京から一緒に来てくださいました。その方が着付けると全く崩れなかったですね。「動いても崩れない着付けの仕方があるんだな」とその時思いました。

榎木先生はそういうことを教えておられるんだと思いますけど、大事ですね。市長も今はちゃんと着物を着ておられますけども、初めはやっぱり苦労されたと思います。

## ◆ 番組小学校について

(松本会長)

本日は二つのテーマで対談をしたいと思っております。

一つ目は、「学びのまち京都」ということで、「番組小学校」。私の自己紹介でも触れましたが、門川市長から改めてご紹介いただいて、現在の京都にどういうふうに結びついているかという話をいただきたいと思います。市長お願いします。

(門川市長)

幕末禁門の変などで、各地のまちなか6割が燃えていました。雨つゆをしのぐ

### 番組小学校

全国初の学区制小学校。学校制度が公布される3年も前の明治2(1869)年、京都では番組という自治組織ごとに町衆がお金を出し合い、わずか1年の間に64もの学校を創設した。子どもだけでなく大人にとっても「学び」の場であり、消防署・警察署・区役所の機能を備え、地域の人々が集うコミュニティセンターでもあった。

令和元年(2019年)に創設150周年を迎えた。



のも大変な時、子どもさえしっかりと育てれば未来は明るい、とまずは学校づくりをした先人たちの偉大さ。それが番組小学校です。地域の人みんなが学校の先生になった。そして、<sup>かまど</sup>竈がある家はみんなお金を出しました。「<sup>かまどきん</sup>竈金」というのは有名ですね。京都ではそこに住んでいる人はみんなお金を出そうというルールを作った。汗をかき、そして知恵を出し合って、子どもを育てました。

江戸時代は土農工商、被差別の人々、まだまだ身分差別が厳しい時代でした。しかし、子ども達は皆等しく地域の宝として育てる。こういうことで64の番組小学校ができました。その次に、京都御所の中に明治13年に芸術大学（京都府画学校）、今の銅駝美工につながる学校ができ、次に工業高校も作られた。

番組小学校の偉大さはみんなが知っているんですけど、これをどう生かすか、ということです。番組小学校のように、地域の人々や親が、学校の先生と一緒にあって学校を作って運営するということは「学校運営協議会」として引き継がれて、今では全国モデルになっています。教育委員会が学校運営するというのもその通りですけども、京都では地域がみんな知恵を出し合って、子どものために汗をかく、そんな取り組みが進歩してきました。これが京都市の教育改革の最大の強みだと思っています。

ですが、この番組小学校はどんどん学校統合して行って、今も残っているのは4校だけです。番組小学校は昭和16年、天皇陛下の勅令（国民学校令）で京都市の財産になりました。それまでは地域の財産だったんです。「ご先祖が寄付しはったんや」という意識がある。だから京都は学校統合が難しいだろう、と言われていました。

私達も、それから地域の人たちも、学校の先生方も、みんなで悩みました。「教育委員会が学校統合のプランを作って提案するということはやりません」と伝えました。「私たちと私たちの先祖が作った学校や」という意見もありました。その通りです。「それじゃあご先祖さんに聞いてほしい。今、子どもがどこに行きたいか。子どもの数が100人を切った。1クラス十数人で学んでいる。それでも、学校を守りますか。それとも、子どもの教育環境を守りますか。これをみんなで考えてください」問いかけるとシーンとしていました。

それから地域とPTAが議論して、教育委員会に提案して学校統合していこうということになり「京都の町衆の伝統を持つる人は偉大やな」と思いました。その学校統合の力が、日本のモデルのような学校づくりになって全市に広がっていきました。

先ほど元向島二の丸小学校跡地活用の紹介をしましたけど、向島の団地や醍醐の団地などもどんどん少子化になっているんですね。そこも統合していこう、ということになっています。これは京都市の教育委員会が提案したのではなしに、親と地域が議論して提案していただいた。

こういう子どもの学びと育ちに、地域や親が、学校の先生と一緒にあって考え、良い方向に改善していこう、ということ。これが「京都の伝統文化を守りながら、創造的な活動をしていただくという事例やな」と、感じております。

(松本会長)

門川市長、ありがとうございました。地域で子どもを育てるといのは、マリ

#### 学校運営協議会

学校運営に保護者や地域の方等が参画する制度。

本市では平成30年度末現在、全国市町村で最多の245の市立学校・幼稚園（小学校は政令指定都市初となる全校）に設置。「地域の子どもは地域で育てる」という理念の下、「子どもたちのために大人として何ができるのか」を学校と一緒に考え、共に汗をかき行動する「学校の応援団」として教育活動を支援していただいている。

も一緒だということでしたが、やはりこれからは、市民に何ができるか。地域にいる子どもたちを自分たちで育てる。そういう精神が今でも生きているというお話をさせていただきました。

小学校区の話は、なかなかどの地域も難しく、人口が減ってきていて、合併をしないといけない。そうすると、デザインは誰がするのか。各地で揉めていることがある。京都はボトムアップで提案してもらって、それを教育委員会が議論をして返すという仕組みを作っているのは立派だと思います。

## ◆ **ダイバーシティ (多様性) について**

---

(松本会長)

それでは、次のテーマに移ってみたいと思います。

次のテーマは「ダイバーシティ (多様性)」。これは話がいくらでも展開すると思います。

地域コミュニティが変わっていき、世界も変わっていきます。「日本も単一民族ではもはやない」という話を、先ほどサコ学長もおっしゃっていましたが、「ダイバーシティって一体何だ」と。それぞれ見方が違うと思います。

地域のコミュニティを見ると、ダイバーシティがそんなに入り込んでいるわけではないですね。京都市でも、色んな外国人が地域に定着する方向にはありますが、まだまだだと思います。

ダイバーシティと言うと、「女性を大臣にしましょう」とか、「外国人を受け入れましょう」ということが盛んに言われますけど、そういうこと言わなくても、先ほどのお話でサコ学長がおっしゃったように、「言わなくても、自然にいろんな意見の人が混じり合う」ということが最終目標になるだろうと思います。

言うは易く、実際はなかなか難しい。文化が全く違う人が、それぞれ自分の意見を「こうだ」と思っている。意見がそれぞれ違う人たちが、地域コミュニティの中でどうやっていくか。あるいは大学の中でどうやっていくか。会社の中でどうやっていくか。

サコ学長が、精華大学で働く外国人の比率を 30~40%にするという目標を設けるとおっしゃっていましたが、まだそこまではいっていないわけですね。大学はまだまだ、京大もいってませんね。理研でも 30%はないですね。20 数%しかまだありません。なかなか難しいんです。

そういうことについて、話をさせていただきたいと思っています。

それでは、榎木委員から、ダイバーシティについて伺いたいと思います。何でも結構です。

(榎木委員)

時代とともに変化する、ということもありまして。私は着物についての「不易流行」という話を。

ちょっと時代を遡りますと、江戸時代だけでも、徳川家康が徳川幕府を作って、大政奉還するまでの 260 年間、この間でも随分着物には変化がありました。伝統衣装と言われているので、ずっと昔から続いているかと思われがちですけども、時代時代で流行があり、そして経済の事情でも大きく変わってくるということ

感じています。

江戸時代初期の頃というのは、「対丈（ついたけ）」という短い着丈で、女性は「細帯（ほそおび）」という細い帯を上で結んだり、横で結んだり、自由な着方をしていました。それは戦国時代から続いていて、そんなに裕福な着物が着られなかった。

ところが中期になって江戸幕府が安定してくると、町人たちに経済力がついて、着物が豊かになっていきます。友禅染ができるのもその頃ですが、着物の裾の丈が長くなり「引き裾」、そして帯の幅もどんどん広がっていく。大きい時は60 cmの幅とか、そういうことになりました。

そして江戸時代後期、幕末になると、ようやく私が今着ている「お太鼓結び」というのが完成する。

時代とともに動きがあります。現在は、江戸から明治、大正、戦争があっても、令和に至るまで江戸末期からのスタイルが続いているということで、そろそろ変化が起きてもいいのかな、と。

学生たちを見ていると、着物に憧れて、留学生も着物が着たいと言って私の授業を受講してくれるんですが、結局は着付けが大変だから、出来なかったり着られなかったりしますよね。

時代とともに変化していくことは、そろそろ受け入れていく時かなと思います。今の日本はどうなんでしょう。平和なのか、経済がいいのか悪いのか、それによってもまた変わると思うんですけど、そういう変革の時なのかなと思います。

#### （松本会長）

ありがとうございます。時間軸を取ってダイバーシティというお話をいただきました。サコ学長はいかがですか。

#### （サコ学長）

文化の話だけで言うと、先ほど榎木委員が言っていたように、私たちは「古くからずっとあるもの」が継承されてきているということにこだわっている人が多いんですが、その時代その時代にあるもの、社会の構成員が変わっていくと、文化の中身も当然調整されていくというのが重要なんです。

それが例えば、どういうふうに起こっているかという、ダイバーシティには「いやいや昔からこうだったから」と、ちょっと抵抗感がある。でも、昔からずっと続いているものはなくて、実は、その時代その時代で変わっているというのがあるのかなと思っています。

ダイバーシティの何が一番これから難しくなっていくかという、私たちは、人を評価したり、あるいは意見を出したり、いろんなことを基本的には「枠組み」でやっていることが多いんですね。「外国人」とか「日本人」、「中国人」、「韓国人」とか言っていることが多いんじゃないかなと思うんです。外国でもそうなんです。「中国人留学生」とか、「韓国人留学生」とか枠組みで言ってるんですが、一人一人と話すと、全然他とは違うことが分かります。

ダイバーシティというのは、「個」が大事になってくるんですよ。パッケージではなくて、一人一人を、どうやったらその人がきちんと活躍できるかというこ



とを考え、保障してあげる。あるいはその人が社会参画できるように育成する。大学ではそういうことが重要だと思うんです。

だからパッケージの時代ではなくて、「個」というものから始まる社会の構成、社会の在り方をどういうふうにしていくのかというのが非常に重要じゃないかなと思っています。

#### (松本会長)

ありがとうございます。例えば、民族同士の対立でも、同じ民族でも、「個」が重要だというお話がいただきました。

確かに、ダイバーシティは一人一人が違う「個」を持っているということが重要で、それをまた、聞く耳を持たないといけない。その両方で成立するんですね。

例えば、男性の声と女性の声、男性女性というのも、男性の中にも色々違う意見があるし、女性の中にも違った視点がある、と。そういうことが大事だということをおっしゃっていたと思います。

門川市長、何かダイバーシティについてお考えを。

#### (門川市長)

サコ先生が精華大学の学長になられて、本当に大変な人気です。ダイバーシティが理屈ではなしに共感できるというのも嬉しいですね。

先ほどおっしゃった通り、国家単位、「日本人」、「京都人」などパッケージで評価できるものではない。もちろん共通している部分もあるけど、一人一人が違う。だから、これから LGBT も含めて、一人一人の違いを認め合い、そしてどう共生していくかということが大事だと思います。

京都の面白さ、最大の都市特性は、「宗教都市」だというのが大きいんだと思います。お寺も神社も教会も、あらゆる宗派の人が仲良くしているという、「寛容の精神」というのも京都の素晴らしい、また日本の素晴らしい特性で。

例えば幼稚園とか保育園。その幼稚園、保育園には宗教がバックにあっても、みんなが宗派を超えて仲良くして、何十周年記念の行事などではクリスチャンの格好をした人が般若心経をあげたり、お寺の人が賛美歌を歌ったり、こんな姿は世界にあんまりないんじゃないか。

「それぞれの信じる宗教で、世界の人々が幸せに、平和になっていくということを実践しているな」と、そういう京都の素晴らしい強みを感じました。

ただ、最近ちょっと気になるのが、一気に外国人観光客が増えたから、文化の違いで拒絶反応のようなものが起こっている。これは非常に大事なことで、京都に来る時には京都のマナーというのがあります。「郷に入れば郷に従え」それをしっかりと学んでほしい。

十数年前にも、嵐山に周恩来さんの碑があるんですが、それを見に中国人観光客が一気に増えて不協和音があったことがありました。お寺や神社のお札などをだまって持って行ってしまったりとか、土足で上がってはいけない所を土足で上



がってしまったりとか、色んなことが起こって。

それで、その時にチームを組んで、どういう問題があるかということ調べて、中国から来た人にも色々理由を聞いたら、「街を歩いていたらティッシュペーパーを無料でくれるし、このお札も無料だと思った」と。他も調べてみたら、「ここを土足で上がってはいけない」とか、中国語で何も注意書きが書いてなかった。

そういう事を一つ一つ解決していったら、落ち着いてきました。説明せずに「いやそんな、阿吽の呼吸でわかるやん」とか「常識やないか」というのは絶対に通用しません。そういうことから、また違う文化がわかりあって刺激しあって、新たな文化を創造していく。こういうことが大事だなと実感しています。

#### (松本会長)

先ほどサコ学長もおっしゃいましたとおり、個々の意見が大事です。みなさんは関西の人が多と思うんですけども、関東に行くと発言しにくいという人がおられます。組織とか、考え、政治でいうと党派とか、国全体の方針が出ていることに対して、違う意見は言いにくいとおっしゃる方が散見されます。

京都では個々の発言、例えば京都大学の先生は結構個性があって、「政府が何を言おうと私はこう言う」と言う人が結構います。そういう個々の意見が割合、自由に言えると思いますね。おそらく、京都市民の間でもそういう意見があって、「あそこはこういうことしてるけど、うちはせえへん」とか、そういうこともきっとあるだろうと思うんです。

そういうのもきっと多様性の基盤で、何かを主張する以上、自信を持って言えるように個々の特性を出していただく。その全体のステアリングを自治体なり、町がやるということが多様性の基本じゃないですかね。

民族、国民とか集団の多様性じゃなくて、個々の多様性が自由にある。今日の話のエッセンスではなかったかと思います。



#### (門川市長)

「SDGs (エスディー・ジーズ)」という、国連で4年前に決められた2030年までの達成目標、「誰一人取り残さない」「全ての人に健康と福祉を」「全ての人に質の高い教育を」「全ての人に毎日安全な水とトイレを」こういう17の目標と169のターゲットがあるんですけどね。かつて国連では国際婦人年、国際障害者年、国際児童年とか、いろんなことを日本でも取り組みをしていましたけど、それを全部包括的に取り組んでいく。そして、今、日本の815市区の取り組みの中では京都が一番進んでいるという評価も日経新聞の調査で明らかになったんです。同時に、これからますます大事です。これはまさにダイバーシティそのものでもあるなという風に感じています。

#### (松本会長)

ダイバーシティはそれぞれの、今日お越しのみなさんにも個々の意見があろうかと思いますが、それもお互いに聞く耳を持つということが一番重要ではな

いかと思っています。人の意見を聞くというのはなかなか難しいことですが、聞きながら、自分を変えていく。

最も難しいことは何か、私もずっと考えていたんですけど、「自分を変える」ということなんですね。小さいときから教育を受けたり、勉強したりして、自分の頭の中にある「常識」ができていますよね。それを見直してみる、考え直してみるというのはなかなか出来ないんです。一番難しい「自由」というのは、「自分からの自由」だと私は思っているのですが。自分の中で固まってしまったものから自由になるということが出来るためには、「対話」やはり人の話を聞くというのが最も大事なことだろうと思っています。

今日は、色々な経験がお有りの方々からお話をいただきました。今後、「生涯学習」というのがキーワードになりますから、生涯、自分の頭の中にいっぱいある、経験したことの無い部分を学んでいく、そして自分の中の知識、常識を少しずつ変えていく勇気が大変重要ではないかと思っています。

今日はサコ学長それから着物の専門家の榎木委員に来ていただいて、また違った視点もあったと思います。

どうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。折角ですので、会場から何か質問を。

(質問者)

京都市民はもっといろいろな場所や行事に足を運んで京都を知るべきではないか。4名の方に聞いてみたい。

(松本会長)

みなさんそれぞれ、京都と関わりのある方ですので、何かご意見があると思います。私は京都市民ではありませんが、京都で長いこと過ごしましたので愛着があります。

京都のことをどれくらい知っているかということ、おそらく、平均的な京都市民くらいは知識があろうと思いますが、おっしゃるとおり、京都の歴史、日本の歴史というのをどれくらい知っているかということ、ちょびっとだと思います。全体の中で考えているので、京都が他と比べてどうか、ということはあまり掘り下げたことはありませんね。祇園祭で鉾を見てもあまり深くは考えていませんでした。

それは皆さんも同じかなと思いますので、それぞれが京都を見直す、自分が考えている京都をリフレッシュするということが大事だろうと思います。

(榎木委員)

私の受け持っている同志社大学の学生のクラスは日本人と留学生がいるんですが、海外に留学した人も私のクラスを受講しています。「海外にいた時に、自分は日本のこと、京都のことが全然話せなかった。恥をかいた。」とあって、飛び込んでくる。

外に行って初めて、日本や京都を知るということもあると思いますので、なる

べく私の授業では祇園祭などは説明して、「機会があったら見てきてね」と言っているんですけども、小学校、中学校、高校でも祇園祭に触れてきてほしいな、と思っています。

#### (サコ学長)

私が東京などに行くと、「京都に住んでる」と言うと、「えっ、生活し辛いんじゃないか」というふうに使われます。「いやいやそんなことはない」、どうしてかという、京都は外国人に優しいんですよ。京都の人たちは、同じ日本人には出さないかもしれないけれど、外国人には自慢したがるかもしれません。(笑)

話を聞くと、「うちは日本で一軒しかないんだ」とかそういうことを結構言ってくれる。聞く姿勢を見せれば、みなさん OK なんですよ。

中途半端に関わると、ちょっと排他的になりますが、好奇心を持って話を伺うと、みなさん色々対応してくれる。1回2回では「京都弁でしゃべられて何を言ってるのかよくわからん」というのはあるかもしれませんが、何回も同じ店に通うと仲良くなり、本当に京都の深いところを教えてくれるので、私はその恩恵を享受して、日々を楽しんでいます。

#### (門川市長)

京都を知り、みんなで考えて行動するというのが、このフォーラムですね。250団体がそれぞれの専門分野を生かしてフォーラムの中で交流し、学び、その成果を共有しようということ。それがどんどん広がればいいなと思っています。

今はネットでもできますので、ぜひ発信もしていただきたいなと思っています。

最近、教育委員会が、「小学校で卒業までに全員が茶道の体験をしよう」ということを始めました。今までも一部ではできていたが、全員が茶道を体験する。今ならまだ団塊の世代の方々が指導に入ってくれて、文化を継承できる、ということで。華道では中学校の3年間で1回は生け花を体験します。そしてその生け花を持って帰って、家でお父さんお母さんに生けて見せてもらうんですね。

こういうことをやったら、子どもたちが真剣に学んでいるというんです。できたら、次は着物の体験をすとかね。

この頃、昔の家でできたことを、学校ですることになってきた。大変素晴らしい文化が蓄積されているので、これを今の時代に我々がしっかりと取り組んで、次の世代に伝える。こういうことをしたら、より文化の振興にもなっていく。その魅力を国内外に発信し、文化で京都を元気にし、市民生活を豊かにし、その力で日本中を元気にしていく責務があるんじゃないかと思っています。

魅力にあふれた京都。混んでる、混んでるとマスコミでも報じられていますが、京都には世界遺産だけでも17か所あって、お寺は約2,000か所ある。そのうち混んでる所は10か所程度だそうです。

だから、みんなでもっと「こういうところに魅力がある」ということを発信してもらったら、どんどん来てほしいところに行ってもらえる。みんなで魅力を実感し、発信し、全体が高まるということをしていき

#### 京都市立小学校「茶道体験事業」

文化庁の全面的な移転(2021年度中を目途)を契機に、京都市立小学校・小中学校(前期課程)に通う児童が「茶道」を在学中に一度は体験する機会を創設。

令和元年度から令和3年度の3カ年の年次計画で、令和元年度は32校で実施し、令和3年度にはすべての小学校・小中学校(前期課程)(163校)で実施予定。



いなと思っています。

ありがとうございました。(会場拍手)